

吹田市

文化財ニュース

No.21

平成12年3月31日

〒564-0001

吹田市岸部北4丁目10番1号

吹田市立博物館

TEL(06)6338-5500

FAX(06)6338-9886

吉志部古墳で発掘調査を実施！



▲吉志部古墳 現地説明会風景

平成12年1月から2月にかけて、吉志部古墳^{きしべこふん}において発掘調査を実施しました。昭和47年^{せきしつ}以来の再調査で、吹田市内で石室の現存が確認されている唯一の古墳として、今後、その保存と整備を図ることを目的として実施したものです。

(詳しくは4～5頁へ)



▲吉志部古墳位置図

平成11年度の主な文化財保存事業



吉志部古墳 調査風景

平成11年度、吹田市におきましては垂水遺跡、高畑遺跡、高城遺跡、中ノ坪遺跡、高城B遺跡、吉志部古墳の6遺跡において発掘調査を実施しました。

垂水遺跡では千里丘陵下の平野部において弥生時代後期の遺物とともに、柱穴や溝等を調査しました。

高畑遺跡では平安時代の建物跡、鎌倉時代のスキ溝跡等を調査しました。

高城遺跡では、平安時代を中心とした遺物とともに溝や土坑等を調査しました。

中ノ坪遺跡では弥生時代から古墳時代にかけての遺構・遺物を調査しましたが、ここでは方形区画をもった弥生時代の溝が発見され、方形周溝墓の可能性が考えられています。

高城B遺跡では、古墳時代中期から後期にかけての遺物とともに落込み跡や柱穴等を調査しています。

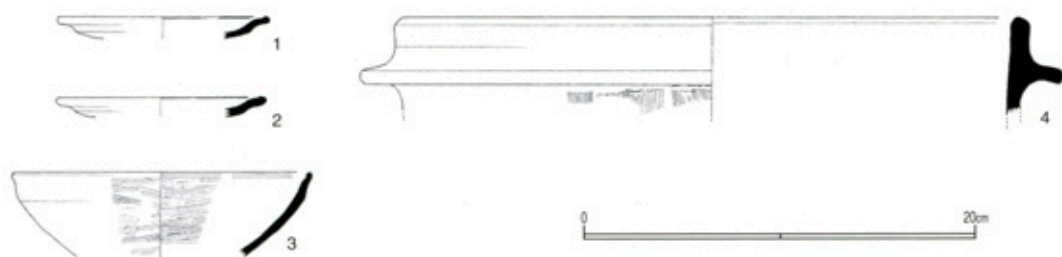
吉志部古墳の発掘調査は昭和47年以來の再調査で、その保存・整備を目的に実施したものです。



▲高城遺跡 調査風景

平成11年度には、この他に遺物包蔵地域内外におきまして40余件の試掘調査と約120件の立会を行いました。そして、遺跡周辺地における試掘調査によって、新たに5ヶ所で遺跡が発見されました(2月末現在)。

なお、発掘調査のうち、高畑、高城、中ノ坪、高城B遺跡での4件の調査については、試掘調査によって新たに遺跡の包蔵地として確認された地点において実施したものです。



▲高城遺跡出土遺物 実測図
 1・2、土師器 皿 3、瓦器 椀 4、土師器 釜

埋蔵文化財調査以外の事業としては、市文化財保護条例によって指定及び登録された文化財を保護していくために補助金を交付していますが、平成11年度には都呂須、六地藏、西奥町の3自治会所有の市指定有形民俗文化財である地車及び地域無形民俗文化財に登録された泉殿宮神楽獅子、権六おどり、山田伊射奈岐神社太鼓神輿に対して補助金を交付しました。

また、宗教法人吉志部神社によって、重要文化財である神社本殿に対しての防災工事が国、大阪府及び吹田市の補助金を受けて実施されました。

吹田市岸部北4丁目にある吉志部神社の本殿は歴史上、貴重な建造物であることから平成5年8月17日に国の重要文化財に指定されました。

吉志部神社本殿を含めて、我が国の重要文化財に指定された建造物の大半は木造建築であることから、これらの歴史的な建造物を守っていく上では、特に火災に対して十分に注意することが必要です。そのため、文化庁や大阪府教育委員会の指導を受けて、貴重な文化財である神社本殿を火災から守るために自動火災報知設備及び放水銃等の消火設備が設置されました。

▶吉志部神社での自衛消防隊による防災訓練



吉志部古墳の発掘調査の概要

吉志部古墳は吹田市岸部北4丁目の吉志部神社本殿東側の南斜面にあります。昭和47年に吹田市史編さん室・関西大学考古学研究室等によって発掘調査が行われ、古墳の内容の一部が明らかとなりました。

今回の調査は古墳の保存と整備など将来的な活用を図るため、その現状をつかむことを目的として、平成12年1月から2月にかけて実施したものです。

今回の調査では、前回調査後に埋め戻されていた主体部（遺体を納めたところ）の現況を再確認し、その周辺の部分に細長い調査区を設けて状況を調べました。

今回の調査で新たな成果としては、墳丘（古墳を形作った盛り土）の一部を確認し、周溝の可能性のある落込みを検出したことなどがあります。墳丘と主体部については前回調査で明らかとなったことが多く、これに今回の調査成果を合わせると次のようになります。

①古墳は丘陵の東南斜面の中腹に築かれ、墳

丘の大半は流失していますが、直径9.5mを測る円墳と推定されます。墳丘の後ろ側には周溝が設けられた可能性があります。

②古墳の主体部は石組みの横方向に入口をもつ横穴式石室で、その奥壁と東側壁の石組の一部が残っています。現存部の計測値は長さ3.3m、幅1.1m、高さ0.6mです。床面には河原石の石敷きが認められました。横穴式石室は一般に遺体を納めた棺を置く部屋である玄室と外へつながる通路である羨道に分かれますが、この石室は玄室と羨道の区別がない無袖式の横穴式石室です。

③出土遺物は、石室内から須恵器（杯身、長頸壺片、壺片）、土師器（小破片）、鉄器（刀子、鏃、釘）、玉類（ガラス玉）など、墳丘の調査区からは須恵器片、瓦片などが出土しました。石室内より釘が出土したことから、木棺が納められたものと思われます。

④古墳の構築された時期は、出土遺物等から7世紀前半頃と考えられます。

以上のとおり、吉志部古墳は、南斜面に築か





▲横穴式石室 東側壁

れた立地にあること、畿内では一般に古墳の新たな築造が少なくなる7世紀前半の古墳であること、主体部が無袖式横穴式石室であること、出土遺物の内容から、終末期群集墳（小規模な古墳が狭い範囲に密集して築かれた群集墳のうち、7世紀に入り新たに墓造りを始めるもの）を構成する古墳であり、そのうち、初めの時期に築かれたものと考えられます。

さて、こうした終末期群集墳の築造が終わった後、近くで火葬墓（火葬された骨などを納める墓）の築かれる例が河内のいくつかの調査で指摘されています。このことにより、終末期群集墳と火葬墓は密接な関係があり、同一氏族に

よる造墓が想定されています。一方、当地では、吉志部古墳の西方約130mに吉志部火葬墓（8世紀末）が確認されており、こうした例に当てはまる可能性があります。このように、紫金山の丘陵南斜面は7世紀以降、墓域として意識され、同一氏族による造墓が行われたのかもしれませんが。

ところで、千里丘陵では古墳時代中期から後期にかけて須恵器の生産が盛んに行われました。現在その窯跡が数多く確認されており、古墳時代の吹田は大阪府下でも有数の須恵器の生産地帯であったと考えられています。そして、この須恵器生産との関係もあって吹田市内では



▲横穴式石室 奥壁

築造された古墳が少なかったとも考えられています。このような中で、吉志部古墳は吹田市内では石室の現存を確認できる唯一の古墳で、古墳時代の吹田を解明する上でたいへん貴重なものといえます。今後、その保存と整備を行い、活用を図っていきたいと考えています。

新規発見の遺跡について



▲新たに範囲の拡大した遺跡

吹田市では、遺跡周辺地において開発等の工事が計画された場合、必要に応じて試掘調査を実施しております。そして、試掘調査によって、毎年数件の遺跡が新たに発見されています。ここでは、平成10年度と平成11年度に発見された遺跡について紹介します。

平成10年度には4件の発見があり、中ノ坪遺跡、垂水南遺跡、昭和田遺跡B地点、吹田操車場遺跡で、それまで知られていた遺跡の範囲がさらに拡大することが判明しました。中ノ坪遺跡では主に中世以前の遺構・遺物が検出され、垂水南遺跡と昭和田遺跡B地点では古墳時代の遺物が検出されました。また、吹

田操車場遺跡では、(財)大阪府文化財調査研究センターの試掘によって、旧石器時代から中世にかけての遺構・遺物が確認され、その範囲の拡大に至ったものです。

平成11年度におきましては5件の発見がありました。高城遺跡、高畑遺跡、都呂須遺跡、中ノ坪遺跡、高城B遺跡の5遺跡で、いずれも遺跡の範囲が拡大することが確認されました。都呂須遺跡では中世の遺物包含層が検出され、遺跡の発見となりました。他の4遺跡については2頁に紹介した通りですが、中ノ坪遺跡については、平成10年度の発見地から北西に約250m離れた地点で新たに確認されました。

高畑遺跡第2次発掘調査の概要

今回の発掘調査は平成11年9月から10月にかけて吹田市昭和町で行われました。調査地点からは、平安時代中頃、平安時代末～鎌倉時代前半、鎌倉時代後半～室町時代前半頃と考えられる遺構面3面がみつかりました。

このうち、最も深いところで発見された遺構面からは、掘立柱建物跡1棟と南北方向の溝跡1条が発見されました。

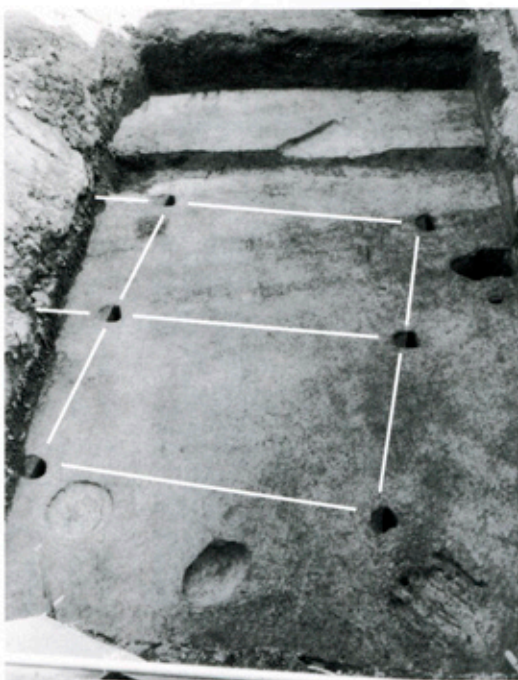
この建物跡は、2間(南北は3.85～3.89m)×2間(東西は6.15～6.32m)で、やや平行四辺形をしていました。ただし、最も東側の柱列と他の柱列との間には、南北方向の溝が縦断していたことから、2棟の建物が並んで建っていた可能性も考えられます。この建物の柱穴は9基みつかっていて、その形は隅丸方形か円形でした。一辺の長さまたは直径は約18～29.5cm、深さは約21.8～43.8cmを測ります。柱穴内の土砂は、下の方に黄色や灰色などの粘土が薄く幾層にも重なり、その上には濃い灰褐色の粘土が厚く入り、そしてその周囲には灰色の粘土が幅約1～2cmで巡っていました。もしかすると、

この濃い灰褐色の粘土のところに柱が据え付けられていたのかもしれませんが。さらに、の中には黒色土器などが含まれていたことから、平安時代中頃に機能していたと想定されます。なお、この柱穴には建て替えられた痕跡が見当たりませんでした。そのため、短期間の利用で放棄された可能性も考えられます。それ以後の遺構がいずれもスキ溝と考えられる溝だったことから、一時期居住地となり、さらに農地へと土地の利用方法が変化したと考えられます。これについては、当遺跡南方の高城B遺跡でも同様で、平安時代中頃の建物が廃絶した後は、近代に至るまで農地として利用し続けられており、この地域に共通した、何らかの事情があった可能性も考えられます。

今回の発掘では、他に縄文時代の石鏃、5世紀前半と6世紀後半の須恵器も出土しました。当遺跡の周辺の遺跡でも、同じ頃の遺構・遺物が出土しており、昭和町一帯にはこれらの時代の遺跡が広範囲に分布していると考えられます。



▲東側の調査区で発見された溝と建物跡



▲西側の調査区で発見された建物跡

中ノ坪遺跡第3次発掘調査の概要

今回の発掘調査は、平成11年12月に吹田市岸部南3丁目で行われました。調査地点からは、弥生時代～古墳時代と考えられる遺構面がみつき、そこからは方形の区画とその周囲を巡る弥生時代後期の周溝状の溝2条、直線に伸びる古墳時代の溝1条と多数のピットが発見されました。また、これらの遺構内からは弥生時代中期～古墳時代後期の土器や石器が多数出土しました。

このうち、方形の区画は、南北約4.6m・東西約3.39m以上の範囲の平坦面で、この中からは同じ時期の遺構の存在については確認出来ませんでした。その周囲には3方を取り巻くように溝が巡っていました。この溝は、幅約48～116cmで、深さは東西方向では約40.9～53.5cmと深くなる一方、南北方向では約3.3～5.5cmと極めて浅くなるなど、一般的な通水用の溝とは明らかに異なる様相を示していました。調査範囲の関係から、全体像を明らかにすることは出来ず、盛り土等は失われていましたが、溝の形態や出土遺物から、この遺構は弥生時代の小規模な方形周溝墓ではないかと考えられます。

調査地からは、この他にも古墳時代のピット・足跡と、まっすぐ伸びる溝がみつかりました。溝については、幅約113～120cm、深さ34.9～42.6cm、方位N76°36'Wで、溝内からは甕や高



▲今回発見された弥生～古墳時代の遺構



▶周溝状の溝近景（東から）



▲出土した石核

杯など、古墳時代の土師器や須恵器が出土しました。この溝は、先述の周溝を斜め

に貫くように延びており、開削の際に以前からあった溝の一部を利用したとも考えられます。

中ノ坪遺跡は、千里丘陵の裾に伸びる低い丘の上に営まれた遺跡で、これまでも古墳時代前期の集落が見つかっています。今回、弥生時代中期～古墳時代後期の遺構や遺物が発見されたことから、この時期にまで遡る集落についても付近に存在した可能性が考えられます。